

ヒュームの因果論における必然性の観念について

澤田和範

はじめに

『人間本性論』第一巻第三部第十四節「必然的結合の観念について」は、ヒュームの因果論における主要テキストとして、とりわけ重要視されてきた箇所である。しかし、その記述は、個々のパラグラフが言わんとすることは明瞭に見えるにもかかわらず、全体としての整合性を一度考慮し始めると、必然的結合の観念とは何なのか、という議論の核心さえ容易に掴ませないものになる。本稿の課題は、観念の起源についてのヒュームの説を読み解き、それを通じてヒュームの因果論の基調を探り当てることである。

本稿が目指すのは、ヒュームの因果論の批判的検討ではなく、それに先立つべき理解である。したがって、ヒュームの主張が全体としては基本的に正しいはずだという想定から出発し、どこまで整合的な解釈ができるかを追究することになる。言い換えれば、できる限りヒュームに好意的な解釈を試みるというのが、本稿の方針である。

本稿の議論は以下のように進行する。第1章でヒュームの議論を概観した後、第2章で、その議論に見出される問題を明らかにするため、ヒュームの説明は無限後退に陥らざるを得ないという説得力のある解釈を紹介する。第3章では、その解釈からヒュームを擁護することを通して、必然性の観念についてのヒュームの見解を明らかにしたい。まずヒュームの意図を確認し、次いで、その意図を汲みつつ問題の印象を特定する。ここで確認されるヒュームの意図こそが、ヒュームの因果論の基調をなすのである。続く第4章で、必要な論点を補足するとともに、必然性の観念を発見する際のヒュームの議論に注目する。

1. 必然性の観念の発見

この章では、ヒュームの因果論の大部分を占める観念の起源の探求を、本稿の理解に必要な限りで概観する⁽¹⁾。しかし、そもそもなぜ観念の起源が問題なのだろうか。ヒュームは、「正しく[因果]推論することは、推論に関わる[因果性の]観念を完全に理解することなしには不可能」(T 1.3.2.4)だと始めに指摘している。観念を理解するには、その観念の起源である印象にまで遡らなければならない。単純観念は単純印象の写しであるという、ヒュームの精神学の根本原理（「複写原理」）があるからである(T 1.1.1.7)。「印象の吟味が、観念に明晰さを与え、観念の吟味が、我々の推論全体に、同様の明晰さを与えるのである」

(T 1.3.2.4)。ここで、ヒュームが「正しく推論すること」について語っている点に注意されたい。ヒュームが概して必然性の観念の発生過程を探求しているとしても、その探求は、少なくとも因果推論の正当化問題に関わっている。

ヒュームは以下のように議論を展開する。我々が原因・結果と呼ぶ二対象を考察すると、両者の間に、隣接と継起という二つの関係がまず発見できる。しかし、「ある対象が他の対象に隣接し先行していても、その原因とは見なされないということがあり得る」(T 1.3.2.11)。それゆえ、「必然的結合[＝必然性]」という関係を考慮しなければならない。ヒュームは、因果推論において特定の原因が特定の結果を必然的に持つと我々が考えることを認める。なぜ我々はそう考えるのか。この必然性の観念は何なのか。その起源となる印象を探求することがヒュームの課題となる(T 1.3.3.9)。

我々は一方の対象の印象が心に現れると、もう一方の対象の観念を思い浮かべる。これが因果推論である。この推論はアプリアリに対象を考察しただけでは不可能であり、経験がそれを可能にすることがわかる。すなわち、二対象が「恒常的随伴」の関係にあるのを経験して初めて、因果推論は起こる(T 1.3.6.3)。経験を考慮に入れることによって、我々は恒常的随伴という新たな関係を発見できたのである。ところが、この関係の発見によっても事態は好転しない。恒常的随伴は「どんな新しい観念もけっして発見できず、ただ精神の対象を多数化することができるだけで、拡大することができない」(ibid.)からである。必然性の観念は依然として見つからない。

そこで、ヒュームは「[因果]推論の本性」を解明するための議論⁽²⁾を挿入する(T 1.3.6.3ff)。仮に、因果推論が理性によって行われるとしよう。そのとき理性は、自然の斉一性の原理に基づいて因果推論を行うであろうが、それゆえ斉一性の原理は、理性的機能であるところの、論証的推理か蓋然的推理から生じなければならない。まず論証的推理について言えば、斉一性の原理は、その反対が矛盾を含まないので、論証不可能である。次に、蓋然的推理は、経験されたものから経験されていないものへの推理であり、これは因果推論に他ならないが、しかし、因果推論は斉一性の原理を前提しているはずであった。「同じ一つの原理[＝自然の斉一性の原理]が、他のもの[＝蓋然的推論]の原因であると同時に結果であることはできない」(T 1.3.6.7)から、自然の斉一性の原理は、蓋然的推理には基づかない。以上の議論の結論は、因果推論において「[精神を]決定しているのは、理性ではなくて」(T 1.3.6.12)、想像力における観念の結合原理だ、というものである。

このことが、実は、必然性の観念の起源に関わることになる。我々は恒常的随伴を対象間に見出すと、理性によらず因果推論を行うことが明らかになった。そこでヒュームは、次の点に注目する。複数の事例において、類似した対象の恒常的随伴を観察すると、

[恒常的随伴という]この類似の観察は、[必然性の]観念の真の原型である新たな印象を精神のうちに生み出す。というのも、十分な数の事例において類似を観察した後は、我々は即座に、一つの対象からそれにいつも付随していた対象へと移行し、[...]それを思い浮かべるように、精神が決定されていること[＝精神の被決定]を感じる (feel a determination of the mind)からである。(T 1.3.14.20)

しかるに「必然性とは、この観察の結果であり、精神の内的な印象、すなわち、我々の思考をひとつの対象から他の対象へと移すべく[精神が]決定されていることに他ならない」(ibid.)。精神の被決定の印象が、必然性の観念の起源となる印象だと一応は言えそうである。

2. 無限後退の疑念

必然性の観念の起源についての以上の説明は、しかし、いくらか不明瞭な点を残している。ヒュームの主張を、たとえば次のように解釈してはどうだろうか。必然性は外的対象の性質ではなく内的知覚の性質であって、我々はそれを知覚することによって、必然性の観念を獲得する。この解釈が意味するのは、事物においては、対象 A と対象 B との必然的結合を我々は知覚できないが、精神においては、対象 A の印象と対象 B の観念との必然的結合を我々は知覚する、ということである。確かに、ヒュームは外的対象と精神とを対置し、「必然性は対象のうちにではなくて精神のうちに存在する何か」(T 1.3.14.22)であることを繰り返し強調している。この解釈は一見妥当に見える。

しかし、このような「精神の被決定を感じる」とは「内的知覚の間の結合を知覚する」ことであるという解釈は、ヒューム自身の記述に矛盾する。必然性が外的対象のみならず内的知覚においても知覚できないことを、少なくとも二箇所ヒュームは明言している。まず、我々の意志と、身体運動ないし精神の思考や感情との間に、我々は必然性を知覚するのだという説が批判される。

要するに、精神の諸作用は、この[必然的結合を知覚できないという]点で、物質の諸作用と同様なのである。[...]内的印象は、外的対象と同様に、目に見える活動力[とその結果としての必然的結合と]を持たないのである。(T 1.3.14.12)

第二に、さらに端的に、ヒュームは次のように主張している。「我々の内的知覚の間の結合原理は、外的対象の間の結合原理と同様に、知的に理解できず、[恒常的随伴の]経験

によって知る他には、知りようがない」(T 1.3.14.29)。つまり、内的知覚の間の必然的結合は知覚され得ない。

では、ヒュームは、必然性の観念の起源をどう説明したのだろうか。ヒュームの説明は、実際のところ、無限後退に追い込まれてしまうという解釈がある(木曾, 1995, 529 頁以下)。この無限後退説によれば、必然性の観念の起源をヒュームは以下のように説明した。

ある対象[A]が我々に提示されるとき、それは、直ちに、それにいつも伴っていることを見いだされる対象[B]についての生き生きした観念を精神に伝える。そして、精神のこの被決定が、これらの対象の必然的結合をなす。しかし、観点を対象から知覚へ変えるならば、そのときは、[A の]印象が原因であり、[B の]生き生きとした観念が結果であると考えられるべきであり、これらの必然的結合とは、[A の]印象の観念から[B の]観念の観念へと移行するように決定されているのを我々が感じる際の、新たな被決定のことである。我々の内的知覚の間の結合原理は、外的対象の間の結合原理と同様に、知的に理解できず、[恒常的随伴の]経験によって知る他には、知りようがないのである。(T 1.3.14.29)

我々は外的対象において、必然的結合を知覚することはできない。我々は外的対象間の必然性を信じるために、精神の被決定に訴えることになる。しかし、「この精神の被決定の印象とは対象 A の印象の現前が対象 B の観念の現前の原因であるという、したがって、対象 A の印象が対象 B の観念と必然的に結合しているという印象に他なら[ない]」(木曾, 1995, 531 頁)。そうだとすれば、厄介なことに、この対象 A の印象と対象 B の観念との必然的結合に関しても、事態は外的対象間の必然的結合の場合と変わらない。「我々の内的知覚の間の結合原理は、外的知覚の間の結合原理と同様に、知的に理解できず、経験によって知る他には知りようがない」(T 1.3.14.29)とヒューム自身が認めているからである。したがって、この解釈によれば、ヒュームはここで次のような議論を展開したことになる。

ヒュームは、仕方なく、対象 A の印象と対象 B の観念との間に想定される「必然的結合」も、対象 A の印象と対象 B の観念との間に実際に存在する関係ではなく、精神が対象 A の印象の観念の現前によって対象 B の観念の観念を思い浮かべるように決定されているという、さらに内的な被決定性の印象に過ぎない、と主張する。(木曾, 1995, 531 頁)

対象間の必然的結合は、精神の被決定、つまり「その対象の知覚」間の必然的結合で説明できたのだから、今度は、その知覚間の必然的結合を「その知覚の知覚」間の、別の新たな精神の被決定で説明してしまおう。これがヒュームの戦略だというわけである。

しかし、このような議論では、問題を先送りにしただけで、観念の起源を説明し切れないことは明らかであろう。つまり、精神の被決定の印象とは内的知覚間の必然的結合の印象に他ならないのだが、他方で、ヒュームの主張によれば、我々は内的にも外的にも必然性を知覚できない。したがって、対象間の必然的結合を精神の被決定で説明しようとする、精神の被決定に含まれる必然性を、さらに内的な精神の被決定で説明しなければならず、無限後退に陥る。この解釈に従えば、ヒュームは必然性の観念の起源を説明するに当たって「無限背進に陥ったことを気づかなかった」(木曾, 1995, 615 頁)ということになる。ヒュームの因果論は本質的な点で失敗したと結論することになるのである。

ヒュームが、一方で、「精神の被決定を感じる」と主張しながら、他方で、外的対象間にも内的知覚間にも必然的結合を知覚できないと主張していることに鑑みれば、無限後退説はヒュームの因果論の避けがたい破綻を捉えているように見える。しかし、これはあまりに破壊的な解釈である。この解釈から、ヒュームを救い出すことはできないだろうか。

無限後退説に対して、さしあたり、次の二点を指摘できる。第一に、内的知覚の間に必然的結合が知覚できないことに気がつき、そのことに注意を促しているのはヒューム自身である。自ら注意しておきながら、その知覚不可能性の帰結となる(と指摘された)無限後退に気がつかないというのは、不自然に思われる。ヒュームは、そもそもどのような理由で、内的知覚間の必然的結合の知覚不可能性を指摘する必要があったのだろうか。

第二に、より重要なのは、無限後退を導く(と指摘された)主張がなされた位置である。無限後退説に従えば、この主張は必然性の観念の発生を説明するために不可欠である。必然性の観念を手に入れるためには、次々に内的な精神の被決定に訴えていくことが必要だからである。(あいにくヒュームはこれが悪性の無限後退であることに気づかなかった。)しかし、それにしては、問題の主張の登場が遅すぎるように思われる。「精神の被決定」というヒュームの議論の中核となる主張が登場するのはT 1.3.14.20 であるが⁽³⁾、そこから始まる一連の主張は、T 1.3.14.23 で一応の区切りを迎えていると考えられる。なぜなら、T 1.3.14.24 において、ヒュームは自身の提供し得る「すべての逆説のなかで、現在の逆説が、もっとも極端なものであるということ」を認め、この逆説に対する「人類の根深い偏見」を警戒し、その偏見を除去するには「堅固な証明と推論の限りを尽くすしかない」として、自身の議論の要約を行うからである。それによれば、(一) 二つの対象の単一の考察は我々に必然的結合の観念を与えることはできず、(二) 必然的結合の観念はそれらの対象の恒

常的随伴から生じるのであって、（三）恒常的随伴はそれが生み出す習慣的移行によって精神にのみ影響を及ぼすのであるから、（四）この習慣的移行が力能および必然性と同じものであって、心によって内的に感じられるものである。こうして要約を済ませた後、ヒュームは「人類の根深い偏見」に由来する反論に対して、自説の弁明を展開していく。そして、問題の主張が登場するのは、T 1.3.14.29 である。以上を勘案すれば、必然性の観念の起源に関するヒュームの議論は本質的にT 1.3.14.23 で完了しており、問題の主張は、反論に対する弁明の一環であると捉えたほうがより適切ではないだろうか。

3. ヒュームの意図を考慮した再解釈

以上を踏まえて、ヒュームの議論を解釈し直し、無限後退の解消を目指すことにしたい。無限後退を引き起こす（と指摘された）主張が、実は、予想される反論に対する弁明を意図したものであるとすれば、まずその意図を確認するのが良いだろう。問題の主張がなされる直前に、ヒュームはその意図を次のように明言している。

力能または必然的結合は、我々が対象のうちにはけっして観察できないものであり、我々は、その観念を我々が対象を眺める際に内的に感じるものから、得てくるより他ないのである。そして私のこの主張は徹底しており、私は、私の現在の推論自体を、理解するのが難しくはないであろう一つの工夫によって、この主張の一例として用いる用意がある。(T 1.3.14.28)

さて、無限後退説が言うように、ヒュームは「[精神の被決定を感じること]が、対象 A の印象と対象 B の観念との間の『必然的結合』の知覚でないことを、ここで明示的に強調している」(木曾, 1995, 530 頁)。問題とすべきは、「[必然性の]観念は我々が対象を眺める際に内的に感じるものから得てくるより他ない」ということを、消極的主張と捉えるべきか否かである。無限後退説によれば、必然的結合が知覚されないので「仕方なく」(木曾, 1995, 531 頁)、ヒュームは精神の被決定の印象に訴えることにならざるを得ないのだという。

しかしながら、この主張は、むしろヒュームの積極的主張と見なすべきだと思われる。先の引用を含むT 1.3.14.26-8 において、ヒュームは、自身の因果論に対して予想されるある反論に答えようとしている。その反論とは、「諸原因が、精神とはまったく独立に作用し、それらを眺めるか、それらについて推論する精神が存在しなくても、その作用を続けるということがないかのよう[だ]」(T 1.3.14.26)という反論である。つまり、「原因が思惟に依存することはあり得ない」(ibid.)という反論である。これは、必然性とは精神の被決定

に他ならないとするヒュームの因果論に対して当然予想される反論だろう。これに対し、ヒュームは隣接・先行・恒常的随伴の三つの関係については、精神の作用からの独立性を認める(T 1.3.14.28)。しかし、必然性の観念は、我々の精神の作用から独立には獲得され得ないと主張する⁽⁴⁾。すなわち、「力能または必然的結合は、我々が対象のうちにはけっして観察できないものであり、我々は、その観念を我々が対象を眺める際に内的に感じるものから得なければならない」(T 1.3.14.28[傍点引用者])。このことを示すことこそ、まさにヒュームの意図することであり、これがヒュームの因果論の核心である。

ヒュームの意図を汲めば、T 1.3.14.29 は次のように解釈できる。対象間の必然的結合をなすのは「精神の被決定」である。すなわち、「ある対象[A]が我々に提示される時、それは、直ちに、それにいつも伴っていることが見いだされる対象[B]についての生き生きした観念を精神に伝える」という精神の作用である。これは何を意味するのだろうか。ヒュームがここで強調しようとしているのが、外的対象と内的知覚の対比ではないことに注意されたい。ヒュームは次のように論じる。「観点を対象から知覚へ変えるならば」、今度は、内的知覚がいわば知覚対象となり、「[Aの]印象が原因であり、[Bの]生き生きとした観念が結果であると考えられるべき」である。そうなってしまえば、外的対象も内的知覚も変わるところはなく、原因となる印象と結果となる観念とは互いに分離可能な別個の対象である。したがって、それらを知覚する主体に属する性質、「新たな[精神の]被決定」が、それら内的知覚の必然的結合をなす。ここでヒュームは知覚対象と知覚主体を対比させ、その対比を外的対象間の必然的結合だけでなく、内的知覚間の必然的結合にも「徹底」(T 1.3.14.28)しているのである。それによって、必然的結合が知覚対象に属する、我々によって発見される性質ではなく、知覚主体に属する性質であることが鮮やかに示されている(cf., T 2.3.2.2)。ヒュームはこの結論を先取りして述べていた。「おそらく、最後には、推理が必然的結合に依存するのではなくて、必然的結合が推理に依存するということが、明らかになるであろう」(T 1.3.6.3)と。我々にとって知られる必然性は、我々の精神の働きに依存しており、対象（それが外的なものであれ、内的なものであれ）において精神と独立に存する何かではない。この主張こそ、ヒュームの因果論の中心テーゼである⁽⁵⁾。

しかし、いずれにせよ、ヒュームは必然性の観念の起源をどうにかして説明しなければならない。自身の因果論の意図と折り合う仕方でも、しかも、「印象」・「観念」・「複写原理」で特徴づけ得るような心像論的な自身の観念説によって⁽⁶⁾、ヒュームは問題となっている観念の起源を説明することができるだろうか。ヒュームの観念説によれば、必然性の観念を持つためには、その起源となる印象を持たなければならない。我々は必然性を知覚する必要があるように思われる。しかし他方で、「精神の被決定を感じる」(T 1.3.14.20)と言わ

れたとき、それは内的知覚間の必然的結合の知覚を意味するわけにはいかない。必然的結合が外的対象においても内的知覚においても知覚されないという点は、ヒュームの目論見に照らして、譲ることのできない点だからである。このジレンマは、一見したところ解決不可能であるように思われる。

しかし、解決のための方法が全くないわけではない。一見奇妙なことだが、ヒュームは「必然性の観念」とは言うが、「必然性の印象」とは一度も言わない。「必然性の印象」の代わりに、ヒュームは「[必然性の]観念の真の原型である或る新しい印象」(T 1.3.14.20)、あるいは「精神の内的な印象」(ibid.)、つまり「反省の印象」(T 1.3.14.22)と言う。必然性の観念は「感覚の印象」によって得られるのではなく、「反省の印象」に由来するのである。「反省の印象」は次のように説明されるが、その典型はこのとおり情念である。

まず[感覚の]印象が感覚能力を刺激し、我々に熱または冷、渇きまたは飢え、あるいは何らかの快または苦を知覚させる。この印象の模造が精神によって作られ、これが印象のなくなった後にも残る。これを我々は観念と呼ぶ。この快または苦の観念は、心によみがえるとき、欲求と嫌悪、希望と恐れの影響を新しく生み出す。これらの印象は、反省作用から生じるので、反省の影響と呼ぶのが適切であろう。(T 1.1.2.1)

また、第二巻で「情念は根源的な(original)存在であり、[...]それを他の存在ないし変容の写しとするような表象的性質(representative quality)を何ら含まない」(T 2.3.3.5)と指摘される。

以上を踏まえれば、「精神の被決定を感じる」というヒュームの表現を、次のように解釈するのが、もっともヒュームの記述に整合的であると思われる。「精神の被決定」の感じとは、我々が因果推論を行う際に感じる、ある種の感じである。この感じとは、対象間の必然性についての知覚ではなく、ただの感じ、ただし因果推論という精神の作用に伴って感じられる感じである⁽⁷⁾。「[恒常的随伴という]この類似性の観察が、[必然性の]観念の真の原型である或る新しい印象を、精神のうちに生み出す」(T 1.3.14.20)から、それは反省の影響と言われる。それは、情念と少なくとも類比的に捉えられるような根源的な印象なのである⁽⁸⁾。したがって、無限後退は発生しない。なぜなら、この反省の影響は、必然性についての印象ではないからである。問題の影響が「必然性の印象」と呼ばれなかったのは、おそらく偶然ではない。ヒュームは、因果推論に伴って感じられる感じを、それが必然性を表象していないにも関わらず、「[必然性の]観念の真の原型である或る新しい印象」だと同定したのである⁽⁹⁾。

4. 必然性の観念の発見・再考

しかし、そもそも因果推論に伴う「精神の被決定」の感じとはどんな感じなのだろうか。実際、次のような反論がある。すなわち、「[因果推論]に伴うそのような『感じ』が何か存在すること、それが本当だとはちょっと思えない」(Beebe, 2006, p. 87)⁽¹⁰⁾。しかもその感じは、因果推論のみに伴っているような感じでなければならない。

本稿の見るところ、少なくともヒュームは、因果推論には独特な「感じ」が伴うと考えていたように思われる⁽¹¹⁾。恒常的随伴を観察した後には、「我々は、無理を感じずに(without a sensible violence)、対象を[因果関係]以外の関係において眺めることはできない」(T 1.3.11.4)。あるいは、因果推論に際して「想像力は[...]その途中で立ち止まることにも、別の観念を抱くことにも、一種の不可能性を感じる」(T 1.3.11.12)。さらに、類似と隣接の関係について、因果関係と対照して述べていることにも注目できる。「[隣接と類似]の影響は、きわめて弱く不確かである」(T 1.3.9.6)。つまり「精神は[その関係によって精神が移行する先の対象の]交替を予見し予期し、そもそも最初の瞬間からさえ、自分の作用の束縛のなさ(looseness)[...]を感じるのである」(ibid.)。類似や隣接による精神の移行が因果推論と対照的に論じられていることに鑑みて、因果推論に伴って束縛感を感じるとヒュームが考えていたとしても不思議はないであろう。少なくとも因果推論の自然な精神の移行に逆らおうとすれば、それには独特の強制感ないし被決定感が伴うとヒュームが考えていることは疑いない。因果推論と他の精神の移行とがそれによって区別されるところの、この感じが必然性の観念の起源である。このようにヒュームを解釈することは可能であろう。

しかし、本稿の解釈にはさらに難点があるように見える。問題になるのは、必然性を表象していないような「感じ」を「[必然性の]観念の真の原型である或る新しい印象」と同定するのはどういうわけなのか、ということである。

実際のところ、ヒュームの記述は必然性の観念の起源に関してほとんど明瞭でない。困ったことに、ヒュームは、必然性の観念の起源となる印象についてはほとんど語らずに、必然性そのものを、精神の被決定ないし精神の移行そのものと、もっぱら同一視するのみなのである(T 1.3.14.20-5)。以下に、二つの箇所を引用する。

この精神の被決定が類似性[＝恒常的随伴]の唯一の結果であり、それゆえそれは、その観念が類似性から生じるところの力能または効力と同じものであるはずである。
(T 1.3.14.20)

原因結果の間の必然的結合は、[...]我々の推論の基礎である[と考えられる]。[他方、]

我々の推論の基礎は習慣的結合から生じる[精神の]移行である[他ない]。それゆえ、これらは同じものである。(T 1.3.14.21)

まず、気づかれるのは、これらの同定をする際に、ヒュームが一種の論証を行っていることである⁽¹²⁾。前者においては、我々が（ヒュームにあつては必然性の同義語であるところの）力能または効力の観念を現に持っていることが前提となっている。恒常的随伴を経験すると、我々は対象が必然的に結合していると見なすようになるからであろう⁽¹³⁾。ところで、他方、「精神の被決定」が恒常的随伴の「唯一の結果」である。ヒュームによれば、したがって、「精神の被決定」が力能ないし必然性と「同じものであるはず」なのである。

後者においても、事情はほとんど同様であるが、まず、精神の移行と必然的結合とが同一であるという、この同定の意味を考えるのが良い。次のように考えられる。我々が必然性の観念を基礎的前提に用いて理性的（演繹的）に推理しているという考えが正しいならば、特定の対象が必然的に特定の対象を生み出すという内容の必然性の観念を、我々は推論に先立って持っているはずである。しかし、そのような必然性は対象において発見できなかった。ゆえに、我々の因果推論は、ただ精神が一方の対象から他方の対象へと移行するという事に過ぎない⁽¹⁴⁾。「必然的結合」が因果推論の基礎であるならば、「必然的結合」はこの精神の移行以外の何ものでもない。以上のような意味であろう。この点は注目されるべきである。そして、ここでの問題は、「原因結果の間の必然的結合は、[...]我々の推論の基礎である」という考えが何に由来するのかである。これも、我々が特定の二対象間に必然的結合があると自然に見なす、という事実由来以外には考えられない。

以上から分かるように、ヒュームの探求は、我々が現に特定の対象と対象とが必然的關係にあると考えるという事実に端を発している。問題の印象の同定はそれゆえに可能なのである。「必然性の観念」は因果推論に伴う強制感を起源とする。そのような強制感人間本性に依存した「反省の印象」に過ぎず、対象の必然性を表象しない。しかし、我々はそれを対象に投射し、一方の対象が他方の対象を生み出す力を持っていると錯覚する(T 1.3.14.25)。つまり、二対象が必然的結合の關係にあると見なす。（そのあとで、我々は必然的結合が逆に因果推論の基礎であると思ひ込む。）問題の「反省の印象」が「必然性の観念」の起源と同定されるのは、それを対象に投射する結果、我々が対象を必然的結合の關係にあるものと見なすようになる、そのような観念の起源が発見されたからである。

結論

「我々の内的知覚の間の結合原理は、外的対象の間の結合原理と同様に、知的に理解で

き[ない]」(T 1.3.14.29)という主張は、実にヒュームの因果論の眼目である。外的なものであれ内的なものであれ、対象についてのいかなる知覚も、いかなる理性的考察も、因果推論の理性的根拠にならない。我々は、必然的結合そのものを知覚したり、あるいは対象の知覚から理性的推理によって必然性の観念を手に入れたりできず、したがって、それを基に因果推論をすることもできない。必然性の観念は、むしろ因果推論に伴って感じられる「反省の印象」をその起源に持つ。因果推論とは、「その[究極的]原因に関しては、それらはほとんど知られず、人間本性の根源的な性質へと帰する他ない」(T 1.1.4.6)のような、「自然が予め精神に植えつけ不可避とした能力」(T 1.4.1.7)に他ならない(cf., T 1.3.16)。

ヒュームは必然性の観念の起源をこのような精神の働きに求めた。その当然の帰結は、アプリオリな理性によっては「正しく[因果]推論すること」(T 1.3.2.4)はできないというものである。しかしこの結論は即座に積極的な主張に結びつく。アプリオリには「何が何を生み出すこともあり得る」(T 1.3.15.1)以上、正しく推論するためには、経験に基づいて「原因と結果を判定するための諸規則」を定めるのが適当である(T 1.3.15.2)。以上のようなことが、必然性の観念の検討を通して明らかにされたのである。そうして、ヒューム人間学の方法論である「実験的推理法」が、その根拠を持つに至る。

とはいえ、このことを確立するためには、まだ多くの問題が残っている。とくに、その出生を「人間本性の根源的な性質へと帰する他ない」ような推論が、いかなる理由で正しい推論だと信用されるようになり得るかについては、さらに議論を要する⁽¹⁵⁾。残された諸問題の検討には、別の機会を待たなければならない。

註

- (1) 例えば信念の理論は、ヒューム自身がその革新性を自負しており(T 1.3.7.5n., 1.3.7.7)、その検討が因果論の十全な理解には不可欠であるが、本稿はそれについて論述する余裕を持っていない。
- (2) これは有名な議論であるが、ここで意図されているのが、(俗説に反して) 帰納推論に対する懐疑論の提出ではないことに十分注意されたい。ヒュームの意図は、因果推論が想像力に基づくということの証明である。しばらくの間、ヒュームは必然性の観念の探求から手を引き、因果推論の本性の探求という、いわば迂回路を進んでいるのである。
- (3) 先触れとしては、T 1.3.14.1 に登場している。
- (4) 反論に対するヒュームの回答は、より正確には、精神から独立した原因の作用の存在・非存在について、そのどちらにもコミットしないものとなっている。すなわち、我々が精神の作用と独立した必然性の観念を持たない以上、我々は、必然性が精神の作用から独立していると考えられる限り、必然性という語の意味を理解できない。それゆえ、そのような精神から独立した「必然性」が存在するという主張は、無意味ないし有害である(T 1.3.14.27)。なお、観念説における、観念と言語の特徴的な関係については、(ハッキング, 1989)が詳しく、示唆的である。
- (5) この点に関しては、マウンスの次の指摘は的確である。「ヒュームの最終的な結論は、我々の持つ因果性の観念は精神の本能的ないし自然的な働きから生じるのであって、[対象の]客観的過程を理性的に洞察することから生じるのではない、ということである。」(Mounce, 1999, p. 41)
- (6) この点については、富田(2006, 100-3 頁)が説得的に指摘したような、概念的把握が重要な契機を果たすロックの議論と引き比べることで理解の助けになるだろう。

- (7) ストラウドも「伴う感じ」という点に関して、同じ路線の解釈を採る(Stroud, 1977, pp. 85-6, 1995, p. 466)。
- (8) 神野は次のように述べている。「[力能観念の真の原型である新しい] 印象は事柄についての情報を含まない。その意味で認識値は零である。因果性の持つ必然的結合という観念の本質は、心が習慣に従って推移せざるを得ないその感じ(印象)として定義される」(神野, 1984, 205 頁)。「事柄」には心的な事柄も当然含まれるだろうから、これは同様の解釈を示唆しているように思われる(もっとも、無限後退の問題が主題的に論じられているわけではなく、断言することはできない)。
- (9) 本稿は、「情動主義的解釈」(久米, 2005, 102 頁以下)から、ヒューム因果論の基本的理解や注目点など、多くの洞察を得ている。そして、本稿の採る「非表象解釈」は、必然性は表象されていないとする点で「情動主義的解釈」と一致している。しかし他方で本稿は、因果推論に伴う感じがあくまで内的に感じられると主張する点で、「情動的解釈」と見解を異にする。ヒュームが「情念は[...]表象的性質を何ら含まない」と言うことで意味するのは、情念は他の存在の写し(再現)ではないということ、「その情念のうちに他の何らかの対象への言及を有していない」ということである(T 2.3.3.5)。ヒュームは情念を内的に感じることでそれ自体は否定しておらず、本稿は「非表象解釈」を採るために「情動主義的解釈」を採る必要はないと考える。必然性に関する「情動主義的解釈」には、ヒュームが必然性の観念の起源を説明しようとしているという肝心な点が捉えがたいという難点がある。註(4)も見よ。
- (10) ビービーは他にも「非表象説」に対する反論を提起している(Beebee, 2006, sect. 4.2)。他の反論については、十分な回答を展開する余裕は本稿には残っておらず、他日を期さなければならない。
- (11) 我々が実際にそのような「感じ」を感じるかどうか。これは水掛論になることが予想される。ここでは、ヒュームがそのように考えていた可能性を指摘できれば十分であろう。
- (12) ここで言う「論証」は、ヒュームの術語('demonstration')ではなく、広く一般的な意味で理解されたい。
- (13) 我々はあくまで対象が因果関係にあると考えているという点を、ヒュームは見逃していない。すぐ後で触れるように、ヒュームはこの事実を、我々が投射によって(我々の精神内に生じた)音や香の観念を(外的)対象の性質(の表象)と見なす傾向と、類比的に説明している(T 1.3.14.25)。
- (14) 因果推論をするとき、「我々は原因結果の観念として、常に一緒に随伴してきた[...]ある[二つの]対象の観念以外の何も持たない。我々はその随伴の理由を洞察できないのである。」(T 1.3.6.15)
- (15) さもなければ、「原因と結果を判定するための諸規則」を定める理由がないはずである。

文献

ヒュームのテキストは、

Hume, D. (2000). *A Treatise of Human Nature*, David Fate Norton & Mary Fate Norton (eds.), New York: Oxford University Press (1995, 木曾好能訳, 『人間本性論 第一巻——知性について』, 法政大学出版局。)による。引用に際しては、T と略記し、巻・部・節・段落の番号を示した。訳文に関しては、木曾訳を参考にし、議論の都合に合わせて訳語・訳出を適宜変更した。引用中の[]内は引用者による補足、()内は原語、傍点は原文のイタリック体を表す。

Beebee, H. (2006). *Hume on Causation*, New York: Routledge.

ハッキング, I. (1989). 『言語はなぜ哲学の問題になるのか』, 伊藤邦武訳, 勁草書房。

神野慧一郎 (1984). 『ヒューム研究』, 世界思想社。

木曾好能 (1995). 「解説——II ヒューム『人間本性論』の理論哲学」, D. ヒューム著・木曾好能訳, 『人間本性論 第一巻——知性について』(367-616 頁), 法政大学出版局。

久米暁 (2005). 『ヒュームの懐疑論』, 岩波書店。

Mounce, H. O. (1999). *Hume's Naturalism*, London: Routledge.

Stroud, B. (1977). *Hume*, London: Routledge & Kegan Paul.

—— (1995). 'Hume and the Idea of Causal Necessity', in Stanley Twyman (ed.), *David Hume: Critical Assessments*, 3 (pp. 462-81), London: Routledge.

富田恭彦 (2006). 『観念説の謎解き——ロックとバークリをめぐる誤読の論理』, 世界思想社。

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕